

県中教研 国語部会だより

第 37 号

発行日 令和4年3月
発行所 富山市千歳町1-5-1
富山県中学校教育研究会
編集責任者 土井真由美
題 字 金山 泰仁 先生

語彙を豊かに

指導主事 吉川 真理

今回の学習指導要領の改訂では、全校種、国語科の全領域を通して「語彙を豊かにする指導の充実」が求められています。

漢字字典によると「語彙」の彙という字は、「①はりねずみ、②仲間、③集まり」という意味があるそうです。はりねずみの針は、組織的、体系的にまとまって生えています。語彙は、ばらばらの言葉の集まりではなく、関係のある言葉のまとまりとして捉えるものであるといえます。

では、語彙を豊かにするとは、どういうことでしょうか。

まず、量的な充実を図ることです。知っている言葉を増やすことで、理解と表現の幅を広げ相手との鮮明なやり取りが可能になります。同時に質的な充実を図ることが大切です。語句の意味の獲得だけでなく、語句と語句の関係や、どのように使えるか、どのような役割をするのかを理解し、状況に合わせて適切に選ぶ能力を高めることで、深い理解や豊かな表現が可能になります。

この質と量の充実を図るために、特に一人一人の実態に合わせて取り組める方法が、読書です。読む習慣が付く場や時間を設定したり、ビブリアバトル等で本との出会いを工夫したりして、生徒が自分に合った読書に親しむことができるように積極的に働きかけることが大切です。

語彙が豊かになることによって、生徒は、「こんな素敵な言葉が見付かった」「自分の気持ちの表現にぴったりの言葉を選ぶことができた」「語彙が増えて、複雑な文章を読めるようになった」など、使いこなせる語句が増えるよさや喜びを実感し、さらに意欲的に語彙を豊かにしようとすると思われます。生徒がよりたくさんの言葉に触れて語彙を豊かにすることができるよう、工夫を重ね、支えていきたいものです。

(東部教育事務所)

時代の変化と求められる力

部長 土井真由美

今年度から新しい学習指導要領が全面実施され、3観点での評価も始まりました。これまで以上に指導事項が明確になり、より一層「付けたい力」を意識して授業を仕組むことが重要になってきています。また、GIGAスクール構想が前倒しとなり、一人一台ずつタブレット端末が支給されました。学校の現場では、ソフトの面、ハードの面からと新しいことが一気に押し寄せてきた感があります。

第65回研究大会では、3つの地区でタブレット端末を用いた授業が提案されました。接続がうまくいかないといった、ネット環境的な問題もあった一方、「プレゼンテーション」や「意見交換」にタブレット端末を効果的に活用した事例もありました。これまで埋もれていたかもしれない生徒の考えを共有でき、多様な考えに触れることが可能となりました。

道具としてのタブレット端末をいかに授業の中で扱うか、今、模索の段階にあります。授業では、本来の生徒同士の対話を通して、考えを深めることも同時に必要だと考えます。生徒たちが端末を扱う技術は、飛躍的に向上していきませんが、私たちは、常に「どのような力を付けさせるのか」を念頭に置き、思考力・判断力・表現力を培う授業を展開していく必要があると考えます。

感染症が猛威を奮い、制限された生活を強いられた中、これまでとは異なる価値観、変化を求められる時代となりました。また、持続可能な社会の構築を目指し、世界全体で未来に向けて変わろうとしている時代でもあります。時代が大きく変わろうとする中で、自分の頭を使って、自分で考えることができる生徒を育てることができるよう、絶えず研鑽を積んでいくことが求められていると感じます。

(富・楡原中)

第 65 回 研究

新 川 地 区

(下・入善西中)

(1) 研究授業

木村さやか教諭が「三色（三角）ロジック」を用いて、教材「人工知能との未来／人間と人工知能と創造性」を批判的に読ませる指導を提案した。教材は、棋士とAI研究者、それぞれの視点から人間はどのようにAIと付き合っていくべきかを述べた論説文である。本時のねらいは、2つの論説文のどちらかを支持し、三色ロジックを使って自分の考えをまとめることであった。ICTを活用し、Teams上のホワイトボードに意見を集約する予定であったが、接続の不具合により使用できなかったものの、板書の整理で十分対応できた。

木村教諭は、年度当初から事実（青）、解釈（赤）、主張（黄）の3観点から教材文を批判的に読ませる指導を実践してきた



が、筆者の主張を読み取り、評価する力を生徒に付けることを課題としていた。本時では、三色ロジックを用いて筆者の主張にせまる生徒が複数見られた。ペアトークを随所に入れるなど、話し合いは活発に行われ、木村教諭の深い教材研究と日頃の丁寧な指導の様子がよく現れた授業となった。

(2) 研究協議

協議後半では、各校代表者がICTを用いた実践を報告した。Teams等、様々なグループウェアを使った実践が報告されたが、研究授業と同様、ネット環境の不具合により端末が使用できない状況に難しさを感じるという報告が多数寄せられた。

(3) 研究協議（指導助言）

中英美主任指導主事（東部教育事務所）は、研究授業について「指導の方針が一貫していたこと」や「三色ロジックの定着が図られたこと」を評価された。課題として、「指導と評価の一体化」のために、「評価規準をより具体的に設定すること」が重要であるとして指導いただいた。

清水 愛（黒・清明中）

富 山 地 区

(富・水橋中)

(1) 研究授業

富山地区では、加藤大敦教諭が第2学年で「魅力的な提案をしよう～資料を提示してプレゼンテーションをする～」という単元の授業を提案した。新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止対策として、会場は体育館とした。生徒はクロムブックを使用し、モニターに資料を映しながらプレゼンテーションを行った。

ALTの先生に富山の魅力を伝えるためのコースとして、「提案する」という言語活動を通して相手に分かりやすく伝えるように表現を工夫する力を付けようと学習を進めた。6班を2班ずつ3グループに分け、お互いに発表し合い、どのように工夫すればよりよく相手に伝わるかななどをクロムブックに書き込んで共有した。

諸活動をクロムブックだけに頼るのではなく、クロムブックを使用する時間と生徒同士の対話の機会を設定する時間のバランスが大切であることがわかった。

(2) 研究協議（指導助言）

吉川真理指導主事（東部教育事務所）からは、プレゼンテーションのイメージをもたせるために準備段階で優れた例を見せる等の手立てが考えられることや対話を一人一人の学習に生かすために活動後に個人の目標に沿った振り返りを行うこと、自分で学習の調整を行うために学習の記録を残す手立てが大切であること等を指導助言いただいた。



(3) 紙上発表

資料配付のみとなったが、中井ひかる教諭（富・北部中）が新しい観点「主体的に学習に取り組む態度」の評価をどのように行うかという課題について各校の実践例をまとめた。

各単元の最後に、単元を終えて学んだことを自分の言葉で文章に書かせることを行い、その文章の内容で生徒の理解度をとらえ、「主体的に学習に取り組む態度」の評価につなげている事例があった。生徒が書いた文章の評価も新しい観点の評価に適しているのではないかと考えられる。

石田 一（富・奥田中）

大会を終えて

高岡地区

(射・射北中)

(1) 研究授業

丹保芽久美教諭による「文語定型詩に親しむ」の授業では、『初恋』と他詩を比べて音読し、そのよさを味わおう」という課題を設定し、「初恋」と「山のあなた」、校歌の語感やリズムを比較し、その共通点や相違点を見付ける活動を行った。音読を繰り返し行ったり、音数を指折り数えたりする中で、五七調と七五調の韻律の違いに気付くことができた。さらに、「初恋」と校歌の音読したときの印象の違いを考えることを通して、生徒たちは、作品がどのように書かれているかに目を向け、形式と内容の結び付きについて意欲的に思考する姿がみられた。

(2) 研究協議(指導助言)

協議では、詩を形式面から捉える試みの面白さや、今後の和歌の学習へのつながり等、学習の系統性について話し合いが進められた。本時は、内容把握の後、語感やリズムの違いへと理解を進める流れであったが、内容理解は前時までに行っておく方が、ねらいに迫ることができたのではないかという意見や、語感やリズムの違いに気付かせるためには、音読の仕方について一考すべきであったという意見が挙げられた。

阿尾美晴指導主事(西部教育事務所)からは、以下の助言をいただいた。

音読や比較によって「初恋」の特徴的な語感やリズムを感じ取らせるとともに、言葉が醸し出す味わい、表現の仕方の適切さを捉えさせていた。

ねらいに迫るためには、七五調と五七調の違いを知った上で「初恋」自体の七五調の効果やよさに戻る必要がある。可能ならば、題名やテーマとも結び付けて、「なぜ島崎藤村があえて七五調にしたのか」まで考えさせるとよい。

江尻 史世(氷・西條中)

砺波地区

(小・石動中)

(1) 研究授業

角崎要介教諭が、単元「いにしへの心を受け継ぐ」教材「君待つと一万葉・古今・新古今」において、「古と現代の短歌を比較して、『恋』について自分の意見をもとう」という授業(3学年)を行った。古の恋歌と、生徒が創作した恋に関する短歌とを比較し、「恋とは〇〇である。」と定義した上でその内容について話し合い、「恋」についての自分の意見を百字程度でまとめた。「恋」という生徒の興味を引くテーマであり、生徒の実態に合った意欲的に取り組める課題であった。生徒からは「〇〇」の部分にあてはまる言葉として「ジェットコースター」「シーソー」「火」「カカオ95%チョコレート」などの意見が出された。話し合いを通して考えの変容が生まれた生徒がおり、言葉や表現の細部にまでこだわっている姿が見られた。また、「〇〇」の部分タブレットのカードに記入し、公開するというタブレットの一覧性、即時性が生かされた授業展開で、タブレットが生徒同士の意見交換を活性化するために効果的に活用されていた。

(2) 研究協議(指導助言)

今回の研究大会は、各校の代表者が研究授業及び協議会に参加した。協議会は、小矢部・砺波・南砺の3市のバランスや経験年数を考慮したグループ形式で行った。3~4名という人数のため、若手の教員も発言しやすく、成果や課題について焦点化して活発に協議ができた。

指導助言者の木下貴子主任指導主事(西部教育事務所)からは、「比較をする際に観点を示すこと」や「評価のB基準を明確にすること」、「意図的指名をした際にどこがよかったかを知らせること」等の指導助言をいただいた。また、「新学習指導要領に沿った指導案の書き方」について指導助言をいただいた。

津田 昌明(南・福野中)

黒部市中教研

「評価の方法とICTの活用」

年度当初には、学習指導要領改訂に伴い、「評価の方法」と「ICTの活用」についての研究授業を通して、それぞれの在り方を考えることにした。

6月、明峰中学校の水島直純教諭が「ダイコンは大きな根？」の授業を行い、「主体的に学習に取り組む態度」の評価の方法について提案した。事後研では、「主体的に学習に取り組む態度」は「粘り強さ」と「学習を調整する力」の2側面から評価するが、そのためには、生徒の考えの変容が現れているもの（ワークシート、動画等）が必要であるということを確認した。

9月、清明中学校の近堂奈津子教諭がICTを活用した授業を行った。生徒は、中山楓奈選手のインタビュー動画2つを比較し、上手なインタビューの方法について話し合った。また、Teams上のExcelファイルに気付いたことを書き込んだ。ICTの活用により、短時間で意見を集約し、生徒に互いの意見を比較検討させることができた。

清水 愛（黒・清明中）

富山市中教研

「新しい学習指導要領における

評価の仕方とICT機器の活用」

6月部会の若手教員の研究授業は新型コロナウイルス感染症の影響で中止となった。8月部会では、それぞれの学校から「評価の工夫（特に主体的に学習に取り組む態度について）」、「クロムブックの授業での活用法」に関わる各校での実践を持参し、グループワークで話し合う予定だった。1月部会では、クロムブックを持参して、ICT機器を国語の授業でどのように活用すればよいかを話し合う予定であったが、共に中止となった。

今年度から3観点での評価とクロムブックを活用した授業が始まった。来年度以降も、部員同士が授業の在り方や評価の方法等、その時々課題について話し合い、互いに支え合える組織でありたい。

石田 一（富・奥田中）

氷見市中教研

「生徒が主体的に学ぶ授業づくり」

北部中学校の三崎篤志教諭が「身近な出来事を題材に短歌を創作しよう」という学習課題で授業を行った。生徒たちは自由に創作した短歌を班で発表し合い、よりよい短歌とはどのようなものかについて検討した。その後、教科書掲載の短歌について表現の工夫とその効果を学習し、改めて創作を行った。

教科書の短歌をモデルとし、いかに表現するかに重点を置いたことで、生徒は自分の表現に生かそうと読解にも意欲的に取り組んだ。また、創作の際には、タブレットPCを用い、類義語等を調べながら表現を一層工夫しようとする姿がみられた。

生徒が、学びや変容を自覚しながら思考・判断・表現することが位置付いた授業は、生徒が主体的に学ぶとする意欲を高めることにもつながることを再確認することができた授業であった。今後実践を通し、研修を進めていきたい。

江尻 史世（氷・西條中）

南砺市中教研

「言葉による見方・考え方を働かせる授業づくり」

福野中学校の中山麻美教諭が単元「広がる学びへ」教材「枕草子」において、「清少納言は四季のよさをどのように捉えているのだろう」という学習課題で研究授業を行った。清少納言のものの見方や考え方に気付き、自分のものの見方や考え方を広めたり深めたりするために、自分が季節を感じるものと枕草子第一段を比較した。自分と清少納言の考えの共通点や相違点を整理して記述できるワークシートにより、学習活動が視覚的に対比して示され、見通しをもって主体的に取り組むことができた。清少納言には、物だけではなく時間帯を取り上げる気付き、着眼点の鋭さがあることや、視覚以外の五感（聴覚・触覚・嗅覚）からの気付きがあること、「をかし」だけでなく「さらなり」や「あはれなり」、「つきづきし」といった評価の多彩さ、感覚の細やかさがあることなどを、生徒は比較を通して学習した。

言葉による見方・考え方を働かせるために、今後も生徒の実態を基に単元を構想することや言葉に目を向ける学習過程の工夫が必要である。

津田 昌明（南・福野中）